

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02878

研究課題名(和文)アカデミック・ライティング技術の習得を目指したピア・レスポンスの実証的研究

研究課題名(英文)Empirical Study on Peer Response toward Acquisition of Academic Writing Skills

研究代表者

烏 日哲 (WU, Rizhe)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・プロジェクトPDフェロー

研究者番号：00781220

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本語学習者がどのようにピア・レスポンスによって日本語による論文の書き方を学んでいくのか明らかにすることである。日本語で本格的な論文を書いたことがない16名の留学生を対象に授業実践をし、それを記録し、分析した。作文、ディスカッション、教師の添削とコメント、インタビューの四つの角度から考察したことが画期的である。オープンサイエンスの一環として、研究成果である『大学授業の教室談話データベース 留学生ピア・レスポンス』を国立国語研究所のウェブサイトにて公開している。

日本語学習者のコミュニケーション研究
<https://i2-communication.ninjal.ac.jp>

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語学習者のレポートや論文の書き方の指導に、ピア・レスポンスは有力な方法であるが、その指導法の確立に必要なピア・レスポンスの談話研究が不足している。本研究では、全15回の授業記録を、談話を中心に分析するとともに、そのデータをウェブ上に公開した。これにより、学習者がどのように研究の分析方法を日本語で表現する技術を身につけていくのか、そのプロセスを明らかにするデータが共有でき、今後のピア・レスポンス研究の進展に寄与しうる。また、本研究の成果をまとめた論文集は、日本語教師がアカデミック・ライティングをどのように支援すべきか、ファシリテーターとしての指導法を確立する一助となることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify how learners of Japanese acquire skills for writing papers in Japanese through peer response. We recorded and analyzed our practice of classes given to 16 international students who had never written full-scale papers in Japanese. This study is innovative in its four viewpoints: composition, discussion, teacher's corrections and comments, and interviews. As a part of open science, the research outcome "Classroom Discourse Database of University Classes for International Students' Peer Response" is available on the website of National Institute for Japanese Language and Linguistics.

日本語学習者のコミュニケーション研究
<https://i2-communication.ninjal.ac.jp>

研究分野：日本語教育

キーワード：ピア・レスポンス アカデミック・ライティング 協働学習 グループ・ディスカッション 日本語学習者 作文 教室談話 教師のコメント

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として、次の二つが挙げられる。

学習者の視点を生かしたピア・レスポンスのデータ構築の必要性
アカデミック・ライティング技術を習得する過程の解明の必要性

学習者の視点を生かしたピア・レスポンスのデータ構築の必要性

日本語教育では、草創期からインターアクションを重視する授業形態が取られてきたが、それでも教師主導型が中心であり、教師の添削をベースにした作文教育も例外ではなかった。教師をファシリテーターと位置づけ、学習者が自分で書いた原稿を持ち寄り、仲間同士のグループ・ディスカッションで作文の改善を目指すピア・レスポンスという活動型授業が本格化したのは90年代後半であった。池田(1998)に端を発する一連の研究を牽引役に、研究は急速に進んだが、池田・原田(2008)も指摘するように、研究の進捗状況には、分析観点による差があるのが現状である。

産出結果である作文を対象とする研究では、原田(2006)を筆頭はかなり進んでおり、表現の推敲には教師の添削が、内容の推敲にはピア・レスポンスが有効であることがすでに明らかにされている。一方、産出過程であるグループ・ディスカッションを対象にする研究でも成果が上がっているが(広瀬2012など)なかなか研究が進まない現状がある。その背景には、これまでピア・レスポンスの研究が、教師の視点から行われることが多く、学習者がグループ・ディスカッションをどう運営しているか、学習者が他の学習者のアドバイスや教師の推敲を作文にどう反映させているか、学習者がピア・レスポンスによる学びをどう評価しているかといった、学習者の視点を生かしたデータの構築が十分でなかったことがある。

本研究の調査データは、16名が参加したピア・レスポンスの授業全15回をすべて記録したもので、学習者の作文、グループ・ディスカッション、教師の添削・コメント、自身の学習過程に関するインタビューからなる。インタビューを除くすべてのデータはウェブ上に公開しており、その指導法を考える研究者・教育者にとって重要な基礎資料になることが期待される。

アカデミック・ライティング技術を習得する過程の解明の必要性

これまでのアカデミック・ライティングの有力な研究は、既存の学術論文を対象に分析したものが多く(村岡他(2004)、清水(2010)など)高い成果を上げている。しかしそれだけでは、学習者が学術的な内容の論文・レポートをどう書くのか、その困難点がわからない。本研究が対象とする授業では、論文の書き方を六つの段階に分け、学習者が個別に選んだテーマについて執筆させ、最後にその六つをまとめて一つの論文に仕上げるという方法を取っており、学習者がどの段階の作業にどのような困難を覚えたのかが明確にわかるしくみになっている。

このように、日本語で本格的な論文を書いたことがない留学生が一つの論文を完成させるまでのプロセスを、日本語教育の授業活動として追跡した研究は管見の限り存在せず、今後の日本語学習者のアカデミック・ライティング研究・教育に大きな貢献を果たすと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、アカデミック・ライティング技術の習得を目的としたピア・レスポンスの授業の推敲作文、グループ・ディスカッション、教師の添削・コメントのデータベースを構築・公開し、ディスカッションや教師の添削・コメントが作文の推敲にどのような影響を与えているかを実証的に解明するのに役立つ。さらに、授業参加者へのインタビューに基づき、ピア・レスポンスの授業への参加をめぐる意識の変容を明らかにし、学術的ピア・レスポンスの指導法の確立を目指すものである。

3. 研究の方法

本研究では、日本語で本格的な論文を書いたことがない16名の留学生を対象に、ピア・レスポンスによってどのように日本語による論文の書き方を学んでいくのかを、作文、ディスカッション、教師の添削・コメント、インタビューの四つの角度から明らかにする。

具体的には、a. 研究の目的とテーマ、b. 先行研究と本研究の位置づけ、c. 研究の方法と資料、d. 資料の分析と結果の提示、e. 分析結果の考察、f. まとめと要旨の六つの各段階において、ピア・レスポンスの活動前後の作文を比較しながら、以下の3点を明らかにする。

ディスカッションの作文への影響

グループ・ディスカッションで他の参加者のどのようなアドバイスが作文の推敲に影響を与え、それを執筆者が作文の修正にどう生かしたのか。

教師の添削・コメントの作文への影響

学習者の作文に対して教師が行った添削やコメントを、どの程度、どのように取り入れな

から学習者は推敲を行ったのか。
 ピア・レスポンスをめぐる意識の変容
 授業に参加した学習者が、自分の書いた作文や授業のスタイル、日本語による研究活動をどう意識し、その意識がどう変容したのか。

この3点を通し、日本語の論文を書いた経験に乏しい学習者が、どのような葛藤を抱きながら、どのようなストラテジーを用いて日本語による論文の書き方を身につけていくかを分析した。このような分析観点を通して、産出された作文の背後にある学習者の行動と心理を可視化することで、日本語教師がアカデミック・ライティングをどのように支援すべきか、授業のデザインやフィードバックの方法など、ファシリテーターとしての指導法を確立する一助とすることを目指した。

次に、本研究の対象であるピア・レスポンスの授業について紹介する。

当該の授業は2015年度の後期に行われ、社会科学（社会学、法学、商学など）を専門とする16名の留学生が参加している。授業の内容は、ある大学院のゼミの様子を収めたビデオを見て、各自が分析観点を決め、そのゼミの会話の様子を言語学的に分析して論文にまとめるものである。具体的な授業の進行は下記の表をご参照いただきたい。

表 アカデミック・ジャパニーズ授業の内容

回	授業内容	回	授業内容
2	担当分野を絞る	9	データの分析結果を集計する
3	先行研究を読む	10	分析を表現する
4	先行研究を読む	11	考察を表現する
5	先行研究を表現する	12	要旨をまとめる
6	研究テーマを決める	13	論文につなげる
7	研究テーマを表現する	14	成果発表の準備をする
8	データベースを作る	15	成果を発表する

留学生の日本語レベルはN1以上である。出身地は漢字圏と非漢字圏に分かれ、専攻、身分（学部正規生、交換留学生、日研生、大学院研究生、大学院正規生）、日本語学習歴などの面において多様性がある。

参加者は、1回目の授業でオリエンテーションを受けた後、2回目の授業で興味のある分野を絞る。3回目以降は、担当分野の先行研究を読んだり、データベースを作って分析したり、考察や結論を加えたりして1本の論文にまとめていく。最後に、自身の研究成果を全体の前で発表し、受講者すべての論文を論文集の形にまとめて印刷・配布した。

4. 研究成果

本研究課題の主な成果としては、授業記録の公開と学術発表、学会誌論文、論文集の刊行などが挙げられる。以下では研究成果について紹介する。

4-1 授業記録のウェブ公開

本研究は、16名が参加したピア・レスポンスの授業全15回のデータを記録したものである。学習者の毎回の推敲前・推敲後の作文、すべてのグループ・ディスカッション、教師の作文に対する添削・コメント、さらには参加した授業や自身の学習過程をめぐる3回のインタビュー（学期＝15回の授業の開始前、学期の中ほど、学期終了後）が記録されている。個人情報を含むおそれのあるインタビューを除き、すべてのデータはインターネット上に公開した（<https://12-communication.ninjal.ac.jp/教室談話研究/留学生ピア・レスポンス/>）。

ピア・レスポンスのデータベースとしては、これまで数回分の授業を文字化して分析したものはあったが（朴2015など）、アカデミック・ライティングという明確で一貫したテーマを持った全15回の授業について16名もの学習者を対象に文字化したものは皆無である。このデータベースの公開により、ピア・レスポンスの談話の分析や、作文推敲への影響を分析することを容易にし、ピア・レスポンスの談話の授業への応用を考える研究者に大きな貢献をなすと考えられ、これによってピア・レスポンスの研究が大きく進展することが期待できる。

4-2 学会発表、学会誌論文及び論文集の発行

本研究は、3年間にわたり、学会発表4件、学会誌論文2件、図書1件を発信した。（詳細は「5. 主な発表論文等」を参照）

これらの研究成果は、ピア・レスポンスという教室活動のグループ・ディスカッションを推敲作文との比較の中で集中的に分析し、アカデミック・ライティングの技法を身につける過程をつぶさに観察した点に、学術的な特色と独創性があると考えられる。

【参考文献】

- 池田玲子(1998)「日本語作文におけるピア・レスポンス」『拓殖大学日本語紀要』8、pp.217-240
- 池田玲子・原田三千代(2008)「言語教育 ピア・レスポンスの現状と今後の課題」『言語文化と日本語教育』pp.46-83
- 清水まさこ(2010)「先行研究を引用する際の引用文の文末表現 テンス・アスペクト的な観点からの一考察」『日本語教育』147、pp.52-66
- 原田三千代(2006)「中級学習者の作文推敲過程に与えるピア・レスポンスの影響 教師添削との比較」『日本語教育』131、pp.3-12
- 朴恵美(2015)「日本語学習者グループと母語話者参加グループにおけるピア・レスポンス活動の相違 『役割としての支援』という観点から」『一橋大学日本語教育研究』3、pp.37-48
- 広瀬和佳子(2012)「教室での対話をもたらす『本当に言いたいこと』を表現することば 発話の単声機能と対話機能に着目した相互行為分析」『日本語教育』152 pp.30-45
- 村岡貴子・米田由喜代・大谷晋也・後藤一章・深尾百合子・因京子(2004)「農学・工学系日本語論文の『緒言』における接続表現と論理展開」『専門日本語教育研究』66 pp.41-48

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田佳月	4. 巻 7
2. 論文標題 中国語を母語とする留学生の学術レポート執筆不安とその変化についてー協働学習を取り入れたアカデミック・ライティング授業を通してー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黄均鈞，霍沁宇，田佳月，胡芸群	4. 巻 14
2. 論文標題 中国人日本語専攻生の学術コミュニティへの参加過程の分析：中国の大学から日本の大学院へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 29-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15084/00001411	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 烏日哲
2. 発表標題 ピア・レスポンスにおいて学習者はどのように他者のコメントを作文に反映させるのかー「研究の目的とテーマ」の執筆を例にー
3. 学会等名 2018年日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石黒圭，胡方方
2. 発表標題 学術的文章のテーマ選定に与えるグループ・ディスカッションの影響 ピア・レスポンスによるテーマ理解の深まりを巡って
3. 学会等名 第21回専門日本語教育学会研究討論会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 胡芸群, 田佳月, 霍沁宇, 黄均鈞
2. 発表標題 大学院における留学生のアカデミック活動への参加過程の分析：中国の日本語専攻卒業生の学習経験をもとに
3. 学会等名 第 10 回実用日本語言語学国際会議（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鎌田美千子
2. 発表標題 大学・大学院のライティングにおけるパラフレーズと教育上の課題 ピア・レスポンスの事例からの考察
3. 学会等名 2019年日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石黒圭・烏日哲編著、井伊菜穂子・鎌田美千子・胡芸群・胡方方・田佳月・黄均鈞・布施悠子・村岡貴子著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ココ出版	5. 総ページ数 283
3. 書名 どうすれば論文・レポートが書けるようになるかー学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>科研代表者が所属する国立国語研究所日本語教育研究領域では、「日本語学習者のコミュニケーション研究」(https://12-communication.ninjal.ac.jp)にて、日本語学習者・日本語母語話者から収集したコミュニケーションのデータを公開している。本科研の研究成果はそのうちの一つであり、教室場面でのコミュニケーションを対象にしている。 留学生ピア・レスポンス活動における教室談話データベース https://12-communication.ninjal.ac.jp</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村岡 貴子 (MURAOKA TAKAKO) (30243744)	大阪大学・国際教育交流センター・教授 (14401)	
研究分担者	石黒 圭 (ISHIGURO KEI) (40313449)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・教授 (62618)	
連携研究者	鎌田 美千子 (kamada michiko) (40372346)	宇都宮大学・国際学部・准教授 (12201)	